

「主は近い」

ピリピ人への手紙4章4節～7節

「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです」(4:4-5)

仲森文穂

今日のメッセージ要旨

○使徒パウロは、人生の晩年にこの手紙を書きました。わずか4章の中で、「喜び」という言葉が16回でてきます。パウロは晩年、より一層の喜びに生きていました。4:5に「主は近い」とあります。パウロは、イエス様が再びおいでになる日を心待ちにしていたのです。パウロは牢屋の中でこの手紙を書きました。明日も知れない状況なのに、パウロは「喜びなさい」と信仰によって語ることができたのです。「主が来られるのが近い」という信仰は、こんなにも力強いのです。そして、このような経験は、私たち誰もが味わっていることだと思います。

○時々、牧師館に悩み相談の電話がかかってきます。そんな時、相手の淋しさや辛い気持ちに寄り添いつつも、自分の側に希望や喜びがあるかどうかを問われます。人をして「あなたはいつも元気ですね。その元気を私にも分けてください」と言わしめる、そういう「信仰のしるし」があるかどうかを問われます。パウロは5節で「あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい」と言い、また6節では「何も思い煩わないでいなさい」と勧めています。寛容な人とは、なぜこの人はこんなことを言ったりしたりするのだろうか、と心を推しはかり、相手を受け入れていこうとする人のことでしょう。また思い煩う人とは、先の先のことまで心配し過ぎて、まるで心配事の集中豪雨を浴びているような人のことだ、と三浦綾子さんが言っています。

○パウロは6～7節で「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい」と勧めています。心配なことをすぐに神様に打ち明けていけば、平安が心に満ちて、心と考えをキリストが守ってくださる、とパウロは言うのです。これは、きっと彼自身の体験に基づいた言葉に違いありません。私たちもおそらく同じ体験が何度かあるはずですね。

今日は待降節第3週目です。「主よ、早く来てください。この暗い世に、暗い私の心に、喜びと希望の灯をともしてください」と、クリスマスを待ち望みましょう。そして「教会でクリスマスを守りましょう」と知り合いをお誘いして、来週のクリスマス礼拝に臨みましょう。祈って神様からお誘いする力をいただき、イエス様の恵みを共に分かち合いましょう。